

あびこの文化

発行人
村上智雅子
我孫子市
若松122-6
04(7184)
1804

史跡文学散歩「日本橋界隈を訪ねる」

参加報告と感想

吉田 哲

秋冷の小雨の中、十月二十二日（水）史跡文学散歩に当日雨の為欠席者ありましたが、八名の参加者と共に巡ってきました。

講師は経験豊かで詳細な語りの越岡禮子氏。

私は、以前は建築関係の者ですので、少し自分流に書かせて頂きます。

一 東京駅丸の内口

まず、東京駅に着くと4番線と5番線ホームの間にある鉄道の起点。ゼロの起点を表した鉄道標識が立っていました。



（上）ガイドの越岡氏

（下）ポイントを示す筆者（矢印）

駅構内の原敬、濱口雄幸首相遭難の現場を訪れました。各々、銘板と遭難ポイントを示すタイルがデザインされて印象的でした。

続いて、丸の内口を出て、駅前広場で写真撮影。

東京駅丸の内中央口



参加者集合写真【撮影筆者】

東京駅はいつ見ても美しい。

東京駅駅舎の設計者辰野金吾（初代帝国大学お抱え建築家、J・コンドルの一番弟子）の手腕はしつかり歴史の中で生きています。

駅前広場の北側に立つ井上勝（初代鉄道省総裁）像を視察。高い台座に更に長身の井上像を見上げて壮観の思いに抱かれました。

井上は、長州ファイブの伊藤博文（初代総理大臣）、井上馨（鹿鳴館外交）、山尾庸三（初代工部省総裁）、遠藤謹助（大阪造幣局長）と共に英国に留学したメンバーの一人で、生涯をかけて日本の鉄道の発展に寄与した人物です。

東京駅は時代の要

「日本の鉄道の父」井上勝像

請に合わせて大きく姿を変えてはいるものの、辰野金吾設計の丸の内側の景観が保たれているのは嬉しいかぎりです。

因みに大きく変わったところといえば、



濱口雄幸遭難の地はホームから地下コンコースとなり京葉線に至っては直交方向に地下駅が増設されたことです。

しかし、時代の変化の中にも旧丸ビルの高さ三・一mに合わせて周辺のビルが設計されているのは、景観の上でも嬉しいことです。

二 八重洲口

次に八重洲側に渡り、まず訪れたのは、「北町奉行所」跡地。「南町奉行所」が有楽町にあったことを考えると、江戸時代の街の広がりには南北3km、東西は江戸城の外堀（現外堀通り）から大川（現隅田川）までの3km程だったことが偲べれます。



「北町奉行所」跡の碑

「一石（いっこく）橋迷子の標の石碑」。

これは、大災害時の避難所にある行方不明者の揭示板そのものです。江戸の街の繁栄と喧騒混乱の一面を示すものと捉えることができます。

一石橋脇の迷子知らせ石

三 昼食会

お昼は「コレド室町1」の三階「菜な」で、鴨汁そばセットやカツ重そばセットなど風味豊かな食事と歓談を楽しみました。



食事前に、村上会長より五月の文化講演会の辻史郎氏の講演『暗夜行路』に描

かれた日本橋界限」に触れたお話がありました。主人公の時任謙作が兄信行と待ち合わせた場所が、先程歩いてきた日本橋三越本店の角であること等。雨の中でも現在の賑わいや開発中の工事現場も見ることができ、あらためて大正時代の日本橋周辺の様子を描いた志賀直哉の刻明な描写力に感銘を受けたとのことでした。



薬祖神社



本町薬問屋発祥の碑、薬祖神社を訪れました。我孫子の別荘開発の先鞭となつたのは嘉納治五郎だけでなく、杉村楚人冠を我孫子に誘う形になった島田久兵衛（島久）という薬問屋が一番で、その島久さんの縁の地であり、神社の回りはツムラ製薬や救心製薬などの石柱が立っていました。

四 日本橋

当時はルネサンス様式の石造の日本橋でありました。橋のたもとの青銅色の獅子の像は当時制定されたばかりの東京市のマークを抱え、橋の中程には羽根をつけた麒麟像が悠然と雨に打たれていました。

日本国道路元標(石碑)と 東京市の道路元標(支柱) 【モニュメントとして移設】



この日本橋の威容を守るため令和十七（二〇三五年）年には、首都高速を地下化したルートが開通し、令和二十二（二〇四〇）年には高架橋が撤去されるなどの事。晴れた青空の下、この日本橋を見たいものです。

また日本橋は、日本の道路の起点であると共に、関東大震災以前はこの地に魚河岸があり、それが時代と共に日本橋→築地→豊洲と移っていった鮮魚流通の起点でもあるという事でした。今や、世界一のフイッシュマーケットとなった豊洲の起点が道路の起点



首都高速の橋脚に掲げられた「日本橋」の額。文字の揮毫は第15代将軍 徳川慶喜公による。

と重なっており、また、世界一の鉄道事業の起点が東京駅にあること等感慨深いものがあります。

五 貨幣博物館

最後に訪れたのは日本銀行（前述辰野金吾設計）の向かいにある貨幣博物館。

ここでは、物納経済から貨幣経済への移行に関するビデオを観たり、一億円の札束の重さを体感した後に、各時代の貨幣、現行の世界の通貨の実物を観ることができました。しかし、あくまでも貨幣博物館ですのでプラスチックマネー（カード）や電子マネーへの移行に関する展示はありません。

今後、世の中の通貨に対する概念がどの様に動いていくのか、考えさせられるものがありました。



1億円分の札束の重さ10kg

日々の生活の中で、各メディアからの情報だけでなく「フットワークはネットワーク」として実際に体験することは、ヒトとヒトとのネットワークのみならず、街やその歴史とのネットワークになることを改めて感じた有意義な一日となりました。

雨ニモ負ケズ、熱心に解説いただいた越岡講師、ならびにイベントの企画立案をいただいた方々に改めて感謝致します。ありがとうございました。



旧魚市場発祥の碑

会員消息

《ネットワーク“翔21”の活動》



ネットワーク“翔21”代表 芹澤正子

一九九四年頃、子育てを終えた女性たちが、互いに研鑽しあい、深く考える場所を持ちたいと相談し、つくし野の学習塾を会場として、様々な活動をしました。

はじめは、田中順子さんのお料理講座、そして読書・折り紙・華道・洋裁・シヤドーボックスなど、地域の優れた講師をお願いしました。院展院友の重里香さんの絵てがみの講座は好評で数年続き、後に形を変えて県民プラザで続けました。

シアの男性料理講座は会場をアビスタの調理室に移し、好評を得てクラスが増えました。

一九九六年、県民プラザに『千葉県女性センター』開設時の記念フェスティバルに参加するにあたり会の名称を21世紀に大きくはばたこうと、ネットワーク“翔21”と名付け、『アリーテ姫の冒険』などを朗読しました。

二〇〇四年、広島市の平和記念式典に出席し、その夜の公園の芝生で行われた『平和のコンサート』に参加しました。地元出身のNHKの松本圭子さんの司会。佐渡裕氏の指揮で、多くの歌手が登場。それから、平幹二朗の演技。吉永小百合の朗読の映像も映し出されました。霜雨が降り始めましたが、誰一人、席を立ちません。音楽が人に感動を与える力の大きさに心が震える思いでした。私達も、我孫子で、平和のコンサートをしようと思心をして、一年間の準備をしました。

二〇〇六年、開館したばかりの我孫子駅前の『けやきプラザ』の《ふれあいホール》を三日間借り切り、行政からの補助金無しで、第一回“平和のた

めの市民コンサートinあびこ”を、実行委員会形式で開催しました。

二〇〇九年、第四回“平和のための市民コンサートinあびこ”の挨拶にこう書きました。『平和の反対語は戦争だけではありません。今、日本において、世界中の貧困・災害・さまざまな不幸のニュースを見聞きする私たちに出来ることは何でしょうか。どうぞ舞台の出演者と共に、心に深く平和を願いつつ初夏の午後のひとときをお楽しみください』と。

その後、けやきプラザの10階の大ホールは、2階のふれあいホールの控室として使えなくなり、大勢が出演するこのコンサートは、継続しての開催が難しくなりました。

二〇二三年に第七回、二〇二五年は第八回の“平和のための市民コンサートinあびこ”を八月九日に開催しました。

「すずの木ハンドベルクワイア」の涼やかな音色のハンドベルの演奏から始まり、最後は、舞台と会場が一体となつて、「手のひらに太陽を」と、「きょうの日はさようなら」を合唱しました。アンケートには感激したとの声が多く寄せられました。

残念ながら、我孫子市の市民活動は、会員の高齢化とコロナの影響もあつて、活動が難しくなっていますが、私達は、市民の手作りの「平和のための市民コンサートinあびこ」を継続して開催していきたいと思っています。

放談くらぶ

「童謡詩人清水かつらと手賀沼」 感想文

天王台地区社会福祉協議会

ささえあい委員会 根本 一郎

令和七年一〇月二六日(日)アビスタ第二会議室(市民図書館二階)で開催されました。講師の原

田幸四郎さんは、「天王台地区社会福祉協議会」の委員です。今回は「我孫子の文化を守る会」と「天王台地区社会福祉協議会」の共催とさせていただきました。天王台地区社会福祉協議会では、高齢者のささえあい交流支援事業として「体験したい我孫子の至宝・座学と散策」をキャッチフレーズとして交流企画に取り組んでいます。

文学界隈に疎い私には童謡詩人清水かつらは「Who」の存在でした。童謡「靴が鳴る」「叱られて」「雀の学校」の作詞者と聞き、身近に感じる存在になりました。我孫子と白樺派の関係は有名ですが、師事した俳人岡野知十が里見弴から手賀沼の別荘を購入し、清水かつらがこを訪問し謳った作品が「葦きり」「ぬまのほたる」だそうです。「葦きり」は民謡調と言われていますが、残念ながら楽譜がないそうです。分かれば河童音頭と同じように唄われていたかもしれないと思いました。白樺派の巨匠志賀直哉と里見弴が仲たがいで、里見弴が別荘を手放したという話を聞き、ペンネームを考案する際、電話帳を「トン」といったら里見だったことからペンネームを里見弴にしたと中学の国語の先生に聞いたことをふと思い出しました。

もう一つの視点として、丸善の創始者早矢仕有的(はやしゆうてき)と派生する中西屋書店の存在があると思います。この書店から発行された「少女号」の編集に清水かつらが携わり、交友範囲が広がったと推測します。

最後に講師の原田幸四郎さんは「丸善ニスト」です。来年一月二日(金)から一三日(火)まで「早矢仕有的資料展」に実行委員として講演会、ギャラリートークを行うということです。今後も丸善からも含めて我孫子の文化に関する情報を発信して頂けると幸いです。

〔連載15回〕

《世田谷の頃》の原田京平ファミリーを知る・
その7の2 世田谷育ちの「はたおり虫」
―染織家・原田麻那(まな)ミニ評伝―

画家・歌人 原田京平とそのファミリーの旧宅跡地
(現 加藤様 邸ⅡKフラットⅡ東京都世田谷区
桜丘四一九―三十六) 探訪・取材の記

平林 清江

三、作品写真集「原田麻那の染織」、図録「いば
らき工芸大全Ⅲ 染織の巻」、「美しいキモノ」
から代表作を紹介する

① 「原田麻那の染織」から

○着 物

羅陵王(らりようおう)
昭和四一年制作

23p

異域(いいき)

昭和四六年制作 第四五回国展 第四回潮展
京都国立近代美術館蔵

27p

胡地(こち)

昭和四六年制作 京都国立近代美術館蔵

30p

豊幡雲(とよはたぐも)

昭和四九年制作 第六回潮展 山種美術館蔵

41p

月は東(つきはひがし)

昭和四九年制作 第四八回国展 第七回潮展
京都国立近代美術館蔵

43p

連珠文(れんじゅもん)第一作
昭和五〇年制作 第七回潮展

45p

落暉(らくき)

昭和五〇年制作 第四九回国展 京都国立近代
美術館蔵

47p

のしめ元禄(のしめげんろく)

昭和五一年制作 第八回潮展

53p

雪月花(せつげっか)

昭和五二年制作 第五一回国展 第一〇回潮展
東京国立近代美術館蔵

59p

連珠華文留袖(れんじゅかもんとめそで)

昭和五三年制作 第一〇回潮展

63p



原田麻那の着物
つつじ野 昭和32年



原田麻那の着物
蘇芳地のしめ 昭和32年

○タピストリー

天地玄黄

昭和四四年制作 第一回潮展 KDD新宿会館
一階ホールロビーラウンジ壁面

159p

○タペストリー

青銅時代 昭和四二年制作 ジャパンアートフェス
ティバル出品

黒の中 昭和四三年制作

〃

雪宇 昭和四三年制作

〃



綿貫倫子氏(国画会会員・織物作家)の
国展出品作品・タペストリー

② 図録「いばらき工芸大全Ⅲ 染織の巻」から

着 物

蘇芳(すおう)地のしめ 昭和三二年(一九五七)

つつじ野 昭和三二年(一九五七)

龍王の庭 平成三年(一九九一)

本文中の「タピストリー」と「タペストリー」は、引用原文に従っています

蝶のレクイエム 平成五年（一九九三）

図録「いばらき 工芸大全Ⅲ 染織の巻」

平成三〇年一月二日（火）～三月一日（日）開催
茨城県陶芸美術館 編集・発行 茨城県陶芸美術館

「原田喬氏から同展へのご案内」

「同封のチラシか図録にもあるように、いばらき県における染織は古墳から現代まで続く歴史の長さ、質の高さや結城紬に見られる生活との広がりなど、豊かな風土と芸術性が展示室に溢れているのが感じられます。」

そのなかで原田麻那の作品は目を引きまします。図録に掲載されているのは4点ですが、展示されているのは2点です。後期には別の2点と差し替えられると思います。「これらの作品は笠間時代に制作されたもので、当地の皆様には里帰りのように懐かしいものかも知れません。」

麻那が工房を構えていた笠間市芸術村に染色家の阿部忠吉さんがいました。長く途絶えていた水戸黒（水戸染めともいい図録では水戸染めと表記している）に挑戦している、やっと近づいてきた、と語っていました。

残念ながら麻那の後を追うようにして亡くなられました。麻那のことを深く理解していただいた方なに残念でした。麻那は国画会会員でありました。いばらき県内の国画会の皆さまの作品もこの特別展に出品なされ、懐かしく拝見させていただきました。土手様や梶山様の活躍にも敬服致します。

「原田麻那の着物展示（笠間市内 茨城県陶芸美術館）」のご案内 二〇一八（平成三〇）年二月四日付け原田喬氏より

筆者は、平成三〇（二〇一八）年二月二四日（土）に見学。

「筆者からの御礼とご報告」

「原田喬・紀美子様

拝啓 ご無沙汰致しておりますが、お元気にてお過ごしのことと存じます。

我孫子・柏はスギ花粉の大変多い所ですから、ここ数日は、永年の花粉症に悩んでおります。三月は、じつと我慢の月と心得て暮らしています。

さて、過日は図録「いばらき 工芸大全Ⅲ 染織の巻」や招待券、さらにお手紙までご恵送下さり有難うございました。二月二十四日、笠間の陶芸美術館にて、麻那さんの作品二点「つじ野」「蘇芳地のしめ」を拝見いたしました。展示場所としては、理想的で、着物の持つ力強さと魅力をひき立たせるに十分な空間があり、作品の良さが迫ってくるような思いがいたしました。

当日は好天に恵まれ、笠間の風景もゆっくり眺めて参りました。低い山々に囲まれていて、このような静かな環境の中で、一心に織り続けた麻那さんの生き方を想像いたしました。

笠間芸術の森公園は、北関東自動車道友部インターで降りて程無い場所で、途中食事をして、我孫子から二時間ほどで到着することが出来ました。二〇年前に麻那さんと出会っていましたら、色々とお話を伺うことができたのになどと、考えたりします。

それから学芸員の今瀬さんはお休みで、お会いできませんでしたが、麻那さん関連の資料二点「我孫子・白樺派を継ぐ者」、「上智大学国文学論集」を受付にお願いして来ました。さっそく、二五日には、今瀬さんからもお礼のメールが届きました。招待券を二枚頂戴しましたので、矢野さんの奥様にも

お勧めしたのですが、笠間までの運転は、自信が無いということでしたので、又の機会に一緒にすることになりました。

矢野さんの奥様は、テキスタイルは、割と好きだということでしたので、何かの機会が有りましたらお知らせ下さい。それで、実家が笠間にあるという我孫子の友人に招待券を差し上げましたら、大変喜んでおりました。

さて、話は変わりますが、以前原田様が、南（ミナミ）さんと矢野さんとの国際電話の交信内容の記録が残っていたら、ご覧になりたいとのことでしたので、もし、見つけましたら処分せずに知らせて欲しい旨、奥様に御願いしておきました。いろいろと整理しなければならぬので、すぐには出来ないとのことですが、もし有りましたら、御連絡を頂けるとになりました。

それでは、お体お大切にお過ごし下さいませ。

御礼とご報告まで。敬具

平成三〇（二〇一八）年三月三日 平林清江

（メールにて 笠間訪問とその他のご報告）

③ 「美しいキモノ」（259号・二〇一七年春号 ハースト婦人画報社）

柳宗悦の精神を受け継ぐ染織家柳悦孝と悦（よし）博（ひろ）の仕事

「無名の職人の作ったものの中にも美しさを認め、評価した運動として有名な民藝運動の中心人物・柳宗悦の甥にあたる染織家、柳悦孝と柳悦博兄弟。現在活躍する多くの染織家を育てました。二人の仕事と、柳兄弟に師事した弟子たちの作品をご紹介します特集です。」

柳の工房で学んだ染織家のきもの

「悦孝、悦博の工房からは、数多くの染織家が誕生し、現在活躍をしています。ここでは、お弟子さんのなかからきものを主に製作している染織家をご紹介しましょう。女優の松島菜々子さんが着こなします。」

・〔悦孝に師事〕原田麻那作「何処の国」

「両親が画家という芸術家の家庭に生まれた、故・原田麻那さん。

母親が柳宗悦さんに頼み、柳悦孝さんの工房に入り染織を学びます。国画会に所属し、個展などで作品を発表するなど活躍しました。

めがね織の追求の末、独自の織り模様「連珠文」を確立しました。赤地に黄色やブルーの連珠文が映える一枚に黒の帯がモダンなコントラストを見せた装いです。」

・〔悦孝に師事〕清水明子作「清漣」

「女子美術大学工芸専攻を卒業後、悦孝さんの研究室に入った清水明子さん。「大阪万博のユニホームを工房で製作することになり、助手として入ったのがきっかけです」。清水さんも女子美術大学教授として定年まで勤めました。「仕事から仕事を学ぶ」という先生の言葉がいつも心にあります」。

グレーに鮮やかなブルーのグラデーションが映える作品は、緯緋に縞の組み合わせでシャープなデザインに仕上げました。型絵染の帯を合わせて楽しい装いに。」

*「美しいキモノ」の中で、悦孝と悦博に師事した弟子の作品十一点を特集として紹介しているが、本稿では、その中から「原田麻那」と、「清水明子先生」の作品を引用し取り上げた。

四、略年譜

柳悦孝（やなぎ よしたか）

明治四四年（一九一）七月二五日、父柳悦多（やなぎ よしさわ）、母照子の長男として千葉県安房郡北條町に生まれる。大正一二年（一九二三）三月、学習院初等科卒業。四月、中等科入学。九月、関東大震災で父悦多が館山にて死去。以後、叔父の柳宗悦家の保護を受ける。

昭和四年（一九二九）三月、千葉県立旧制安房中学校を卒業。日本画家を志し、卒業後、二年間日本画家片山牧羊のもとで修行。

昭和六年（一九三一）三月頃、叔父宗悦の紹介で、日本画家から工芸に転進するよう勧められ、黒田辰秋に入門。木工の修行をするが、黒田が病氣のため四か月で中断。八月頃、浜松のざざんざ織り（平松実・注5）工房で、外村吉之介と初めて織物に接し、徹夜で機織りに没頭し織物の道に進むこととなる。

昭和七年（一九三二）五月毎日、平松家に通い織の手ほどきを受ける。十一月、京都にて芹沢、平松、外村、悦孝による関西で初めての染織展「第一回新興民藝展」を開催する。

昭和十一年（一九三六）一〇月、東京駒場に日本民藝館開館。開館記念「第一回新作工芸展」に河井・浜田・富本・芹沢・川上澄生・棟方・外村らと共に出品。以後毎年続く。

昭和十五年（一九四〇）日本民藝館理事となる（昭和五八年まで）。

昭和二〇年（一九四五）四月、蒲田の工房が空襲により焼失。五月、東京青山に転居し、一〇月青山で工房を再開する。

昭和二十二年（一九四七）悦孝が住む青山南町の村田邸離れに芹沢が転居。この頃、戦後初めて沖縄を訪ねる。

昭和二十四年（一九四九）四月、女子美術大学芸術学部専任講師となる。

昭和二六年（一九五一）戦後、四度目の沖縄行。四月沖縄の仕事を紹介。

昭和三三年（一九五八）悦孝が設計した「家庭用織機」の広告が、『民藝』71号に掲載される。

昭和四八年（一九七三）四月、女子美術大学芸術学部長となる。

昭和五〇年（一九七五）四月、女子美術大学・短期大学学長。

昭和五八年（一九八三）三月、女子美術大学学長退職（同大学名誉教授）。十一月、永年にわたる女子教育・民藝運動に対する貢献が認められ、勲三等瑞宝章を受賞。

昭和六一年（一九八六）四月、沖縄県立芸術大学附属研究所長及び客員教授になる。

平成二年（一九九〇）三月、沖縄県立芸術大学退官。

平成三年（一九九一）六月、『芭蕉布』を求龍堂（東京）より刊行。戦後に織られた芭蕉布六〇種を添付。

平成一五年（二〇〇三）八月二〇日 老衰のため逝去。九二歳。

*詳しい年譜は、「柳悦孝のしごと 民藝運動と女子美工芸草創期」（女子美術大学美術館 二〇〇七年発行）に収載。

・柳悦孝と女子美術大学工芸科

女子美術大学が、戦後新制女子大学として認可されたのは、昭和二四（一九四九）年、それまであった女子美術専門学校から女子美術大学として体制を整え設置された。新たな大学を構築する中で、工芸科が編成されたのである。女子美術大学工芸科は、他の美術大学には類を見ない、特徴ある構成であった。

当初の文部省へ申請された書類が残されている。工芸科に関する教員名簿を見ると、村岡景夫、園池公功（そのいけ きんなる）*名前の読み方は、

令和四年三月女子美術大学発行「柚木沙弥郎」と「女子美工芸の教育」に関する調査研究報告書18pから引用）、柳悦孝、芹沢銈介、柳宗悦といった名前が列記されている。工芸科設立に当たった精鋭たちである。この五名の教育者の共通点は、柳宗悦の名から分かる通り、「用の美」をむねとする民藝運動の関係者が中心となって構成されていた。中でも、民藝運動の創始者である柳宗悦の甥にあたる柳悦孝が、実質的な女子美術大学工芸科を担って、実に創造的な工芸科の歴史が始まったといえる。

・織物への道―浜松のざんざん織りとの出会い

十二歳で父悦多（よしさわ）を亡くした悦孝は、以後、叔父宗悦のもとで成長した中学卒業後、日本画家になるべく、日本画家・片山牧羊に師事した。しかし、二十歳の頃、宗悦の薦めで工藝へ転進。木工の重鎮・黒田辰秋のところで修行を始めたが、黒田の病のため中断。その数ヶ月後、浜松のざんざん織り工房で、初めて織物に触れることになる。実際に織機に接したとき、機織りに熱中し、徹夜で織り上げてしまったという。この経験が、織物の道に進むきっかけとなったのである。

・〈座談会〉

清水明子―柳先生の授業は驚きから始まるんです。学生たちの新鮮な驚きが、好奇心を沸き立たせるということなのでしょう。

柚木―学生たちをやりたいという気持ちにさせてしまう、のせ上手でした。一瞬にして、虜にしてしまふんです。柳先生が「織」の世界に入ったきっかけは、浜松のざんざん織りだったことはよく知られています。織物の面白さに感動して、徹夜で織り上げてしまったという話もよく知られていますよね。その時

の感動を学生たちに味あわせたいという思いから、そんな驚きの授業を考えたんですね。

つまりね、始めに大きな感動があれば、仕事は続けられるという、確固とした思いがあったんですよ。確かにそうだと思いますね。教えられたことはそれしか出来ないもの。自分で格闘して考え、工夫したことは次の仕事に繋がるものね。柳先生ならではの体験的教育理想じゃないかな。

＊以上は、「女子美術教育と日本の近代 女子美110年の人物史」（女子美術大学歴史資料室編）所収の、第六章 柳悦孝と工芸科―驚きから始まった授業（175～183p）から部分引用。

【その他の参考資料】

・「柳悦孝のしごと 民芸運動と女子美工芸草創期」（女子美術大学美術館 二〇〇七年発行）

・「機織」（「志賀直哉全集」第七巻215～219p 岩波書店）

・女子美術大学所蔵の柳悦孝の代表的作品、

《柳絣着物》、《手紡ぎマフラー》、『芭蕉布』

筆者に起こったこれが奇跡―柳絣着物・手袖マフラーとの出会い

＊平成二三（二〇一一）年三月一日に起こった東日本大震災後の、未だ余震が続く七月五日、女子美術大学歴史資料室にて、柳悦孝先生の代表的作品、《柳絣着物》、《手紡ぎマフラー》そして、『芭蕉布』（戦後に織られた芭蕉布60種を添付）を一度に拝見したことがある。

このことは、同大学の三ツ木知昭氏（前述）のおかげであり、実にありがたいことであつた。また、歴史資料室室長の内藤幸江氏と学芸員の山田直子

氏が、快くご対応してくださったことは印象深く記憶に残っている。

特に、興味深かったことは、「《柳絣着物》はひろげないで鑑賞するようにとのご指導をいただいたが、これは、大変貴重なもので一度ひろげてしまうと、同じように畳むことが難しい」とのことだそうで、作品を傷めないようにとの御配慮であつたと思う。

かくして、ひろげずに畳まれたままの形で、ゆつくりと鑑賞させていただいた。本当に贅沢このうえないことであり、又希有のことであつた。

また《手紡ぎマフラー》も、触れずにそのまま、充分にその質感を感じ取ることができたのである。柳先生の作品は、そのような「優しさ」をまとっていたと思われるのである。

また、同日、美術館のバックヤードにて、三岸節子の作品数点を間近で見せていただいた。

思い出して頂きたいが、三岸節子は、原田睦の女子美術学校時代の後輩であり、原田麻那の我孫子の頃の幼少期を知る画家である。まだ、節子が独身のころの大正一二年、後に結婚する三岸好太郎と共に我孫子町を訪れては、崖の画を描いていた人物である。

とにもかくにも、この号の文章を書きながら、一〇年も以前の素晴らしくも希なる出会いと体験を、今更ながら思い出している。

女子美術大学を代表するだけでなく、現代美術の工芸・絵画を代表する二人の芸術家の作品を拝見できたことは、やはり、京平・睦夫妻の芸術家の魂が生きていることの証ではないだろうか？

美術のことは、ほぼ何も知らない筆者に起こった奇跡といえ、これが奇跡の体験であつた。

言い訳になるが、筆者は、絵画や工芸品などの美術作品そのものと向き合う術・方法を知らない。

また、優れた作品に対して無心の感動はできて、それを表現する言葉さえもままならないのであ

る。そのことが、一〇年もの間、麻那という人間像と、その偉大な作品そのものと、まつすぐに向き合うことを避けて来た理由である。やはり、巨大な壁は近づいても押し戻されるばかりである。

「ここが我孫子、あそこが世田谷」―ミナミと矢野氏

その点においては、原田夫妻の次女南（ミナミ・アストロゴ―画家）の場合は、肉声をお聞きしているということもあつてか、一瞬にして、筆者の気持ちに響くものがあつた。だが、残念ながら、ミナミについての資料は乏しく、ミナミも、また、ミナミの生の声・ことばを最もたくさん聴き取った、矢野正男氏も何も語らずに、すでに遠くへ旅立たれてしまわれた。

今頃は、「いっぱい日本語が話したい」と言っていたミナミと、温厚な矢野氏とで、ニコニコしながら思ひ出話に花を咲かせ、下界を眺めておられるかと想像している。「ここが我孫子、あそこが世田谷」。

*「原田夫妻の次女南と矢野正男氏との出会いのドラマ」については、以前筆者が著した文章がある。南氏と矢野氏の出会いが、あつたればこそ、「原田京平とそのファミリー」の発見、そして研究が、先ず、我孫子から始まり、やがて、世田谷へと移行し発展していったのである。少々長いが、二人の出会いについて、引用しておきたい。

（以下、次号 その7の3に続く）

日本橋刃物屋「木屋」のエピソード

平林 清江

史跡文学散歩「日本橋界隈を訪ねる」に関して



一〇月二二日、我孫子の文化を守る会が史跡文学散歩「日本橋界隈を歩く」を実施された。

散歩の行き先が日本橋界隈ということで、会の担当者から加藤充子氏をお誘いしたが、御都合がつかず、お気持ちにはありながら、参加を見送られることになったとのことだった。

加藤充子氏は、私が執筆している『世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る』（4頁）の記事に関連して、原田京平とそのファミリーの旧宅跡地にお住まいの方である。

私が、加藤充子氏に初めてお会いしたのは、令和元年十月二十一日のことである。

私が「世田谷文学館友の会」の会員として、突撃取材を試みたのである。もちろん、たった一人ではなく、当時の同文学館友の会役員のお二人の応援を借りたのである。

そのときの様子は本シリーズの第一回（一九二号）に写真が残っている。真に記念すべき写真であつた。

世田谷区桜丘における原田京平ファミリーの調査は、加藤充子氏にお会いしたことで、思いの外はよく進展した。原田京平が住んだ桜丘の「聚文画



室」（しゅうぶんがしつ）について、充子氏が記憶をたどり、関連の資料を提供してくださったからである。つまり、筆者の調査の先導役になって、足元を照らしてくださったのである。

おかげで、シリーズの連載は、今号で十五回を迎えることができた。

さて、もうお一方、「聚文画室」の御記憶をたどつて、その全容を明らかにしてくださったのは、充子氏の夫君である。

夫君の加藤氏は、御幼少の頃に、実際同画室に住まれたとのことである。筆者の依頼を受けて、その間取り図面を描いて見せてくださった。

シリーズは、あと数回続くようであるが、その中で、この「間取り図面」を紹介させていただく予定である。是非ご覧ください。

ところで、昨年の夏、充子氏から手ぬぐいが送られてきた。白と紺地の爽やかな手拭いには、「創業寛政四年日本橋木屋創業期の店頭」と染め抜かれてある。「木屋」は、加藤氏の御実家で、この時初めて知った次第である。

また、今年の夏に充子氏から頂いた暑中お見舞いのハガキに、当会の会報誌に載った記事「日本橋界隈のツアー」（史跡文学散歩）に参加したい思いがあつたとしたためられていた。

いつか、また、同様のテーマでの講演や文学散歩が実施される際には、今度こそ、ご一緒させていただきたい、と願っている。

あひだ 120号

「我・孫・子と平将門」

〜東端の島国日本の古代史から読み解く〜

コミュニティアーキテクト 太田安則氏

専門家が登壇した我孫子の歴史講演会に於いて「将門」について、二〇一四年川尻秋生氏による「将門と我孫子の古代」から、岡田清一氏による「相馬を巡る歴史・伝承の世界」、白水智氏による「古文書はいかに歴史を語るか」、山路直道氏による「坂東のかなめ 古代の我孫子を知る」、高木繁吉氏による「相馬御厨と四神相応の地」、手嶋秀吾氏による「最近の発掘調査から見た古代の我孫子相馬郡御厨正倉跡」などで知見が述べられている。

将門研究家勝又清和氏の千葉日報に連載された内容が「令和の新将門記」として書籍となった。氏は中央学院大学で講演されており、成田のお宅に仲間とお伺いし考えをお聞きした。帰り我孫子までの道すがら、勝又氏に関連の場所を車で案内して頂き、将門スピリットが地域を特徴づける大きな要素となる予感を感じた。

将門を地域起こしに集まった仲間と「親子の日イベント」に将門をテーマに座談会を催すことにした。

その準備に古代日本を確認していく経過で、将門神社神官の染谷一夫氏の資料から「日高見国」の存在を知り、田中英道氏の「日高見国とは何か」の小論文に出くわした。観音寺住職の安本正道氏からは神田明神の将門研究資料を頂いた。

また、将門の末裔で、三・一一東日本大震災後の復興に取組まれている旧相馬中村藩 第三四代当主 相馬行胤氏とも相馬野馬追会場でお話しすることができた。

放談くらぶ

何かに後押しされている感覚で資料をまとめた。

日本の歴史の基底に縄文文化があり、世界の東端太古の理想郷日本があり、多様な民族の共生社会が原点であることを改めて確認した。地域情報誌プレステンで日本のルーツの小論を掲載し、近著「日本のルーツ筑波山」の著者い・のみち氏の考察も、日本のDNAを知る道しるべである。

「我・孫・子」はヘブライ語で「我ら先祖たち」「中心地」です。将門スピリット・相馬のDNAで地域を色付けするのは如何でしょう。

専門家でもない者が綴ったものですが、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日時 12月21日(日)午後二時〜四時
場所 II アビスタ第2学習室(市民図書館二階)



「平親王将門」歌川国貞 画

映画「暗夜行路」

特別上映 in 白樺芸術祭

志賀直哉ゆかりの地・我孫子で、昭和三四四年制作による映画『暗夜行路』が特別上映されます。

豊田四郎監督、池部良、山本富士子、淡島千景らが出演のモノクロ作品。現代ではほとんど目にで

きない貴重な映像を大スクリーンでご覧頂けます。各上映後にミニトークあり。(各回先着五〇〇人)



©TOHO CO.,LTD.



©TOHO CO.,LTD.

日時：一二月一〇日(水)①13時15分、②16時45分、上映時間：一四〇分

場所：けやきプラザ・ふれあいホール

料金：一〇〇〇円/枚 全席指定

販売：12月9日(火)までに「セチケットぴあ」(Pコード 555-636)又は「セブンイレブン」のマルチ

コピー機でチケットを購入

問合せ：白樺芸術祭実行委員会

shirakaba.art.fes@gmail.com、我孫子市

商業観光課 04-7185-1734

「広告」の効用を探る

関口 一郎

江戸時代の広告・宣伝

現代の我々は四六時中、広告・宣伝のなかで暮らしている。しかし江戸時代の頃は特別な存在で、広告や宣伝に出会う機会は少なかった。よく知られているのが松坂から進出し、三井越後屋の基礎を築いた三井高利（一六二二～一六九二）が始めた「現金掛け値なし」の商法であるが、江戸前期の一七世紀の後半、元禄期に入る少し前であった。大名・旗本屋敷に呉服などの商品を持参し、それを買ひ叩かれ、掛け売りされていた商法を是正することが最大の目的である。また両替屋もつくった。店頭でそれらの商品を並べ、「現金掛け値なし」の販売を進めるため、「引札」（チラシ）などがつくられたのが広告の初期といわれる。

しかし江戸中期から後期と時代が進むと、町民・農民など庶民を対象とした多品種の商品がつくられるようになり、広告・宣伝の方法も変化する。看板・暖簾はもとより見世物・「チンドン屋」など媒体が広がる。やがて木版刷りも多色となり、ニユーシ性のある瓦版や錦絵、刊行物などが広告媒体の主流となる。現在TVなどで扱われているドラマもそうした時代背景を映し出しているものが多い。

明治末大正初期の広告から解かること

越後屋の看板

現金（金）無掛直（値）



近代に入り市町村の行政組織も次第に整えられてきたとき、地域の「風土記」的な刊行物が郡単位でつくられるようになった。これは「明治」から「大正」への改元に際し、大正天皇即位の記念行事の一つとして、郡単位を基本とした『郡誌』の編纂が進められたことにもよる。しかし資料収集・編纂構能力・資金力などに地方差もあり、刊行に至っていない地域もかなりあったようだ。

今回の稿で取り上げる刊行誌も、行政の関係する『郡誌』ではなく、『○○○郡風土志』と銘を打つ一個人の編纂・執筆によるものである。実は大正元年一〇月発行なので、郡役所などの地方行政から要請される以前の刊行である。なお、当該地域の記念郡誌はこの後、大正八年十二月に『○○○郡誌』上・下2巻に分けられて刊行されている。総頁一六〇〇頁となる大冊である。

なぜ今回『郡誌』でなく『風土志』を取り上げることにしたかには、若干の説明が必要であろう。著者は地元新聞社の「主幹」として活躍中の人物で分析力・編集力に優れる。周囲の協力態勢づくりもしっかりしていたようで他地域の『郡誌』の水準に劣らない。

そして今回この『風土志』を紹介する最大の理由は、四六判、本文二九〇頁の本文の後に、一一六

頁に及ぶ「広告」だけの頁が続いていることである。原則一頁一点で、巧みなキャッチコピーと写真の二分の一ずつというのを目を引く。旅館などは写真一頁と重厚なコピーの二頁取りもある。

何よりの魅力は、明治末大正初期までに急いで漕ぎつけたわが国の「文明開化」の実態を、「地方」の職業・生産物・商品等々の動向を通してその実情を知ることができるからである。

『○○○風土志』の「広告」の分析は次号で取り上げたい。

(続く)



72 鉄形蕙斎 越後屋呉服店・両替店の図 73 越後屋 算盤・印形 74 大坂柏屋が三井両替店にあてた御湯替手形

越後屋呉服店・両替店(左側) 鉄形蕙斎 (『江戸時代図誌』・筑摩書房)

内覧会報告

白樺文学館・杉村楚人冠記念館

村上 智雅子

今年、令和七年五月二六日の朝日新聞の『暗夜行路』草稿発見のニュースは、あちこちに嬉しい波紋をひろげました。あれから5ヶ月過ぎた一〇月に、教育委員会から白樺文学館と杉村楚人冠記念館の内覧会のお知らせが届きました。

一〇月三〇日、内覧希望者一二名(ガイドクラブ七名と文化を守る会五名)で白樺文学館を内覧。先ずは、稲村隆学芸員より、明解な説明があり、この草稿は、大正四年頃、志賀直哉と康子夫人の新婚時代のエピソードを中心にメモされていて、これが後の『暗夜行路』に少し虚構され活かされていること。また、この草稿は我孫子市や研究者にとって、貴重な宝であるばかりでなく、作品の創作過程がわかる重要な資料であるとのことでした。

次にこれらの草稿をもらい受け、大切に保管した小熊太郎吉さんについては、代用教員から校長



になり、町会議員まで務めあげ、後に剥製屋を開いた人物で、信念を曲げない気骨のある人であり、教育に関心を持ち、郷土愛に溢れた人であったとのこと。その人柄故に志賀直哉が草稿を託したのであるうと思われ、勘の良い志賀がしっかりした佳い人に託したため、現在の私達がこの草

市制55周年記念事業
我孫子市白樺文学館特別展
志賀直哉我孫子移住110年

『暗夜行路』草稿初公開記念
『暗夜行路』の軌跡

令和7年10月31日(金) >>
令和8年3月1日(日)

開館時間 9時～16時30分
(入館は開館の30分前まで)
休館日 月曜日(月曜日は祝日の場合は次の平日)
12月29日から1月3日まで

入館料 一般：300円 高校・大学生：200円
団体(20人以上) 2割引き 中学生以下は無料
3割引き 一般：500円 高校・大学生：400円
(3割は白樺文学館、杉村楚人冠記念館、鳥の博物館)
白樺文学館・志賀直哉移住110年(有効期間1年)
白樺文学館・杉村楚人冠記念館
アビスタ「我孫子駅」南口徒歩15分もしくは
我孫子駅南口からバスで「アビスタ前」下車徒歩2分
市営バス我孫子駅南口から我孫子駅南口徒歩10分
10時～11時までは市民(無料)

我孫子市白樺文学館
我孫子市緑2-11-8 ▲白樺文学館
04-7185-2192 ホームページ

稿に出会えることができ、活用し、ありがたいなども熱弁されました。

展示室では、鉛筆で走り書きされたメモの様な草稿が並んで開示され、硯や筆道具も添えられ、隣室では「小熊剥製屋」の看板や蟹の剥製なども展示され、見どころ満載。

短期間にこれだけの資料、人物や時代構想をなされたスタッフの方々のご努力に感謝しました。

次に杉村楚人冠記念館では、「出版で広める、広がる」と題した秋季企画展が催されていました。

先ずは今野澄玲係長から、江戸時代の浮世絵を通して、出版文化が江戸の町民にどのように広がって行ったかを澄んだお声で、分かりやすく説明されました。

今、NHK大河ドラマ「べらぼう」が人気で、浮世絵に感心が高まっていますが、我孫子にも井上家に保存の良い浮世絵が残っており、出版文化の片鱗が伺われるとの

2025年9月30日(火) >>
2026年1月12日(月)
杉村楚人冠記念館 秋季企画展

出版で
広める
広がる

こと。錦絵や歌舞伎絵、遊女絵、風景画、江戸名所絵など、当時の出版状況の変化と歴史について具体的に語られました。

次に武藤真奈学芸員から、楚人冠は収集家で、記録魔であったことや、武藤さん自身が描かれた漫画風パネルを使って、版画印刷の経緯などについて若々しく語られました。版木印刷(三色刷)の体験コーナーでは、参加者が実際に版画刷りを体験するなど、有意義な内覧会となりました。

志賀直哉も小熊太郎吉さん、杉村楚人冠も収集癖と記録魔の力の片鱗を持っていたお陰で、一一〇年後の私達に当時の文化が届き、この次は私達が繋げていかなければならないと実感しました。

まずは、両館に来館して、直に見て、感じられ、お愉しみ下さい。

第五五回「短歌の会」(最終採択の一首)

九月三〇日開催

「軍服でなくブラウスを縫えるわ」と
深呼吸した母の終戦

村上 智雅子

大奥展 行きつ戻りつ見て回り
歩いた歩数一万こえた

前原 安世

ひぐらしの鳴く境内の鬼ごっこ
ふと吾ひとり膝は擦り傷

佐々木 侑

塀際に小花をつけし雑草の
花あるうちはと抜けず十日も

納見 美恵子

墓参り終えた翌日頂くは
母が好んだ黄色の蒸しパン

芦崎 敬己

「きみとなら死ねる」と思ふ一世一代の
恋などありやこの修羅の世に

ひと逝きし晩夏の夏を定刻に

バスは来にけりさびしかりけり

身のめぐり悲しきことを積みかさね
末は花野か荒野か知らず啼(な)きいそぐ蟬の生(よ)七日足もとの
ほたるぶくろとたぐへてあはれ彩(あや)なして花火消えたる一瞬を
容赦もあらず闇は圧しくる

伊奈野 道子

伊奈野道子さんは、この五首の詠草を送られたのち、
去る一〇月二日、薬石効なくご逝去されました。
ここに謹んでご報告します。

当会の行事予定

□ プロジェクト「短歌の会」

第五六回短歌の会 けやきプラザ 10階小会議室

日時 十一月二五日(火) 13:30~

第五七回短歌の会 けやきプラザ 10階小会議室

日時 一月二七日(火) 13:30~

◎短歌を初めて学ぶ方、一緒に仲間になって、
短歌を楽しみませんか。(参加費無料)

問合せ ☎(090)5333-2855(村上)

□ 「放談くらぶ」(概要は9頁を参照)

日時 十二月二一日(日) 14:00~16:00

場所 アビスタ第2学習室(図書館二階)

演題 「我・孫・子と平将門」 東端の島国

日本の古代史から読み解く

講師 コミュニティアーキテクト 太田安則氏

参加費 300円(会員無料)

問合せ ☎(090)5333-2855(村上)

旧武者小路実篤邸 特別公開

通常非公開の武者小路実篤邸跡の特別公開が
間もなく終了します。この機会にご観覧ください。日時 11月8日、11月22日、12月13日(土)、
10時~15時、雨天の時は中止です。

場所 旧武者小路実篤邸(船戸2の21の9)

*駐車場無し *ペット同伴・飲食物持込不
可(蓋付の飲料水を除く)

料金 無料(申し込み不要)

問合せ 三協フロンテア㈱ 04-7133-6666



編集後記 ▼クマによる被害のニュースが連日テレビで報じられている。今年のクマの人身被害も死亡者12人(10月末)で、最悪のペースだ。住宅を始め学校や保育園、公共施設等の生活圏にまで出没している。クマ出没の原因にエサ不足と共に個体数の増加が挙げられる。しかし、市街地の拡大、農業従事者の減少と耕作放棄地の増加等々における人口減少・過疎化が根底にあると考える。民間団体でもある猟友会にクマの駆除を依頼するにも一部の地域でトラブルが生じている。社会構造が変化している状況で、駆除だけでなく安心に生活出来る社会の構築や政策が必要だ。 ▼10月12日、高市早苗氏第一〇四代首相が誕生した。初の女性首相として女性の社会的地位の向上、家父長制社会の改革を大いに期待したいところだ。(あしたか)